

ODIP 4.1 修正パッチ (P1040107004976) リリースノート

2021/10/01

(株) インテリジェント・モデル

ODIP は、(株) インテリジェント・モデル社の登録商標です。

本書に掲載された情報に基づいた行為の結果として発生した損害、利益の損失、経費などについて、(株) インテリジェント・モデルならびに本書の製作関係者は一切の責任を負いません。

本書は著作権法上の保護を受けています。本書の一部あるいは全部を無断で転載・複製することは法律で定められた場合を除き、禁止されています。

目 次

|                                       |   |
|---------------------------------------|---|
| A. 変更内容 .....                         | 4 |
| 1. TEMPORARY テーブルを使用したファイル結合の対応 ..... | 4 |
| (1) 追加されたオプション .....                  | 4 |
| (2) TEMPORARY テーブルの名前 .....           | 4 |
| (3) 必要な権限 .....                       | 4 |
| (4) 内部 DB 使用時との違い .....               | 5 |
| (5) 対応データベース製品 .....                  | 5 |
| 2. 非常に長い計算式・条件式への対応 .....             | 6 |
| 3. その他修正 .....                        | 6 |
| (1) ODIP トランスフォーマの修正 .....            | 6 |
| B. バージョンアップによる影響 .....                | 6 |
| C. パッチの適用方法 .....                     | 6 |
| 1. ライブラリファイルの更新 .....                 | 7 |
| 2. パッチ適用後の確認 .....                    | 7 |

## A. 変更内容

### 1. TEMPORARY テーブルを使用したファイル結合の対応

ファイル結合で ODIP が利用する一時 DB に、これまでの内部 DB だけではなく、外部データベース製品の TEMPORARY テーブルを使用する機能が追加されました。ファイル同士、またはファイルとテーブルの結合が必要な場合、指定されたデータソースで TEMPORARY テーブルを作成し、入力ファイルのデータを一時的にコピーして結合処理を行います。

#### (1) 追加されたオプション

ODIP トランスフォーマの startjob コマンドのオプションに、-tempds (または-temporary\_datasource) が追加されました。-tempds で ODIP のプロジェクトに登録された「データソース名」を指定することで、ファイル結合のために外部データベースの TEMPORARY テーブルを一時的に使用します。ODIP アドミニストレータ、ODIP オペレーションマネージャから実行する場合は、実行ダイアログのパラメタ設定の「外部 TEMPORARY テーブルのデータソース」で指定します。ファイル結合が必要なジョブを、TEMPORARY データソースの指定をせずに実行すると、従来どおり内部 DB の一時ファイルが作成されます。

#### (2) TEMPORARY テーブルの名前

TEMPORARY テーブルは、ODIP のデータセット定義のデータセット名やテーブル/ファイル名ではなく、ジョブ実行時に自動的に生成されるテーブル名で作成されます。生成されるテーブル名は次のルールになります。

<プレフィックス><3桁の連番>\_<セッション識別子>  
 例) ODIPTEMP001\_12345

<プレフィックス>は設定ファイル odip.ini の job.file.jointemptable.prefix で指定された文字列、<3桁の連番>は3桁の連番はジョブ内で TEMPORARY テーブルにコピーする必要がある入力データセットの 001 から始まる連番、<セッション識別子>はデータベース固有のセッションを識別するための ID になります。<プレフィックス>の既定値は"ODIPTEMP"です。

#### (3) 必要な権限

-tempds でデータソースが指定されると、指定されたデータソース情報で DB に接続し、TEMPORARY テーブルを作成し、SELECT 文を実行します。そのため、-tempds で指定されたデータソースのユーザには、CREATE TEMPORARY TABLE を実行する権限の他、JOIN の対象となる他ユーザ/スキーマのテーブルに対する SELECT 権限も必要になります。

#### (4) 内部 DB 使用時との違い

ファイルの結合、ソートが必要な場合、従来は JoinGroup 内のファイル、テーブルはすべて内部 DB の一時作業ファイルにコピーされていましたが、-tempds でデータソースを指定すると、直接 JOIN 可能なテーブルはコピーされずに処理が行われます。

例えば、1つの JoinGroup に次のデータセット 1～4 が定義されているとき、直接 JOIN 可能かどうかによって、TEMPORARY テーブルにコピーされるテーブル/ファイルは表 1 のようになります。

テーブル 1：データソース=DB01(データベース名=database1、ユーザ=user01)

テーブル 2：データソース=DB02(データベース名=database1、ユーザ=user02)

テーブル 3：データソース=DB03(データベース名=database2、ユーザ=user03)

ファイル 4：データソース=CSV (CSV ファイル)

表 1

| -tempds で指定されたデータソース | テーブル 1<br>(DB01) | テーブル 2<br>(DB02) | テーブル 3<br>(DB03) | ファイル 4<br>(CSV) |
|----------------------|------------------|------------------|------------------|-----------------|
| DB01                 | —                | <b>コピーされない</b>   | コピーされる           | コピーされる          |
| DB02                 | <b>コピーされない</b>   | —                | コピーされる           | コピーされる          |
| DB03                 | コピーされる           | コピーされる           | —                | コピーされる          |
| 指定なし(従来の一時的作業ファイル)   | コピーされる           | コピーされる           | コピーされる           | コピーされる          |

#### (5) 対応データベース製品

本バージョンでは Oracle、PostgreSQL のみ TEMPORARY データソースとして指定できます。その他データベース製品は、将来のバージョンで順次対応予定です。

## 2. 非常に長い計算式・条件式への対応

ODIP で定義された計算式・条件式は、ODIP の内部表現に変換後で 4KB の制限がありましたが、最大 1GB~2GB ほどに拡張されました（最大サイズはデータベース製品によって異なります）。ただし、本バージョンでは Oracle、PostgreSQL のみが対象です。その他データベース製品は、将来のバージョンで対応予定です。

## 3. その他修正

### (1) ODIP トランスフォーマの修正

- ① ピボット変換（縦横変換・横縦変換）の出力属性がユーザビューで選択されていない場合、出力前導出演算の計算式、条件式で使用しても値が null になる問題が修正されました。
- ② 同一データセットが複数定義されているとき、リレーション属性に対する内部 DB の INDEX が、一部作成されない問題が修正されました。

## B. バージョンアップによる影響

既存の定義への影響はありません。

## C. パッチの適用方法

本パッチは、次の ODIP 製品に適用してください。

- ODIP アドミニストレータ v4.1
- ODIP オペレーションマネージャ v4.1
- ODIP リポジトリマネージャ v4.1
- ODIP プロセスマネージャ v4.1
- ODIP リポジトリサーバ v4.1
- ODIP トランスフォーマ v4.1

## 1. ライブラリファイルの更新

ODIP\_P1040107004976 フォルダには、表 2 の製品ごとのフォルダにライブラリファイルが含まれます。実行中の ODIP 製品を終了し、製品ごとのフォルダに含まれるすべてのファイルを、表 2 のファイルのコピー先に上書きコピーしてください。

表 2 ODIP\_P1040107004976 のフォルダ構成及びファイルのコピー先

| ODIP_P1040107004976 |     | ファイルのコピー先                   |
|---------------------|-----|-----------------------------|
| lib                 | ADM | ODIP アドミニストレータの lib フォルダ    |
|                     | OPE | ODIP オペレーションマネージャの lib フォルダ |
|                     | RPM | ODIP リポジトリマネージャの lib フォルダ   |
|                     | RPS | ODIP リポジトリサーバの lib フォルダ     |
|                     | TFM | ODIP トランスフォーマの lib フォルダ     |

## 2. パッチ適用後の確認

パッチ適用後は、各製品を起動し、表 3 の確認方法に従って確認を行ってください。

表 3 パッチ適用後の確認方法

| 製品名               | 確認方法  |
|-------------------|---|
| ODIP アドミニストレータ    | ヘルプメニューから“ODIP について”を選択し、表示されたすべてのビルド ID が 1040107004976 であることを確認してください。  |
| ODIP オペレーションマネージャ |   |
| ODIP リポジトリマネージャ   |   |
| ODIP プロセスマネージャ    |   |
| ODIP リポジトリサーバ     | ODIP リポジトリマネージャのツールメニューから“ORMS サーバ情報”を選択し、表示されたすべてのビルド ID が 1040107004976 であることを確認してください。                             |
| ODIP トランスフォーマ     | ODIP トランスフォーマを起動し、showserver コマンドを、オプションに“-info version”を指定して実行してください。表示されたすべてのビルド ID が 1040107004976 であることを確認してください。 |

以 上